

多摩の昆虫（1）

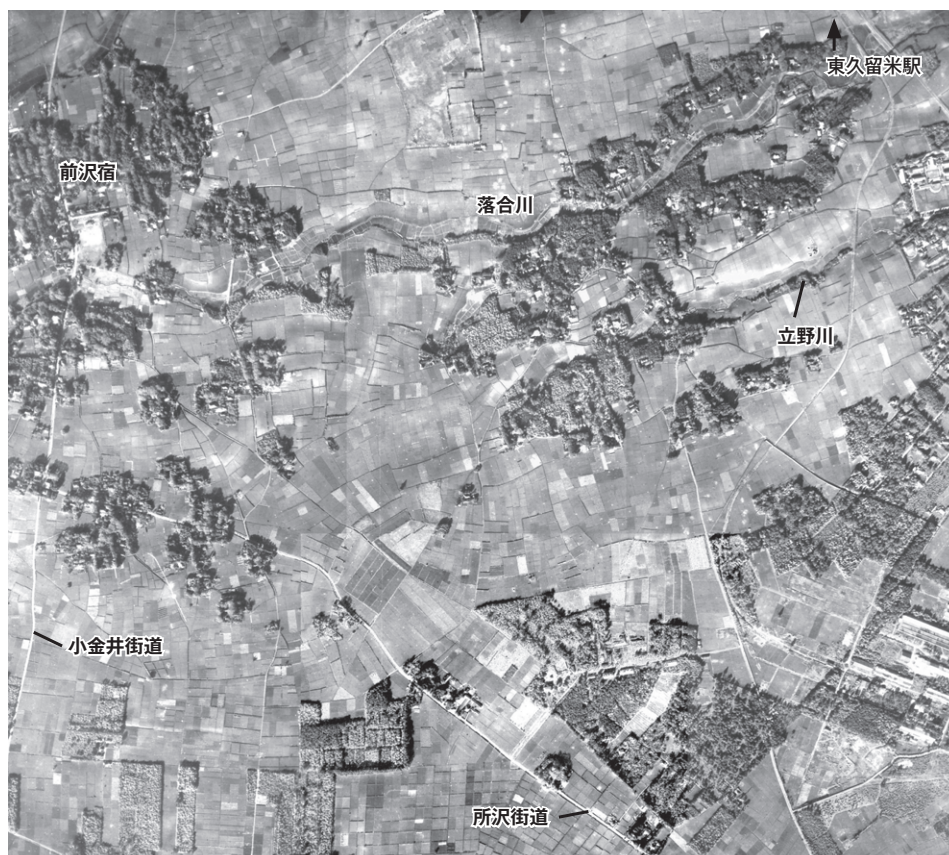
市郷土資料室では多摩地域の昆虫標本約500箱を所蔵しています。これは1980年に当時市立西中学校の教諭であった北原俊幸先生から市に寄贈されたもので、同年10月、北原先生にご執筆いただいて、昆虫の写真を多数掲載した『多摩の昆虫』（市教育委員会発行、357頁、総カラー）を発刊しています。

郷土資料室の貴重なコレクションの一つとして現在も毎年標本の展示を行っていますが、これらの昆虫が採集された時期からおおよそ半世紀が経ち、昆虫たちの生きる環境も大きく変化したと考えられます。そこで今号は、昆虫の世界と東久留米地域の移り変わりについて、北原先生に寄稿いただきました。

「はじめに」

『多摩の昆虫』を執筆させていただいてから四十年近くの歳月が経ちました。原稿作成に際して、東久留米市内を歩き、その自然を見つめ、将来のために残したい自然について考え、本の中でいくつかのことを提案させていただきました。

下の写真は、東久留米の七十年ほど前の航空写真です。これを見ますと、かなり多くのところに、雑木林



が広い範囲にわたって残っているのがわかります。雑木林は武蔵野の自然の宝庫です。一時期この雑木林が急速に減少し、そこに生息する生物が激減したことがありました。このことに気付いた多くの人の努力により、現在保存林として残っているところがあります。

今の私たちは、今の自然環境を『文化財』として考え、これを大切に保存していくことが必要であると考えています。

五十年前の高校生の手記から

以前、時間があるときは決まって、近くの雑木林に出かけた。

春の雑木林では、新芽が出るころになるとミヤマセセリが舞い、ハエなどの双翅目の仲間も飛び始めていた。エノキの新芽にはゴマダラチョウの幼虫の姿が見られ、田畑には「春を待っていた。」と言わんばかりに、モンキチョウやモンシロチョウ、キチョウなどが飛び始めていた。

やがて雑木林は緑を広げていく。そのような時期に雑木林に行ったら、学生らしき昆虫採集者が四～五人いて、捕虫網を使って昆虫を採集していた。その中の一人が「ここにはたくさんいますね。」と言ってきた。

「たくさんいますね。」というのは、雑木林の代表的なチョウである、アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミドリシジミ、オオミドリシジミなどのゼフィルス^{*}と呼ばれるチョウのことを言っているのだ。その話をしているとき、他の学生たちは皆で木の枝をたたいていて、このチョウ



が飛び出したところを捕まえようとしていた。そのたたき方はひどいもので、枝が何本も折られ、落ちてくるのを見た。これでは昆虫採集ではなくて、自然荒らし（「自然破壊」という言葉はこのころはほとんど遣わなかった。）である。こういう採集は絶対にしたくないと思った。

夏本番になると、樹液を出す樹木に、たくさんの種類の昆虫が集まるようになる。クワガタの仲間やカブトムシ、カナブンといった甲虫の仲間に加えて、スズメバチの仲間も多い。チョウではよく見るのはゴマダラチョウなどで、時折オオムラサキなども見かけることがある。

ある日、ノコギリクワガタやカブトムシなどを採集して帰宅しようと思ったら、男の人が近づいてきて

「あの、このあたりに、カブトムシやクワガタムシはいませんか。」

と声をかけてきた。見ると小学生と思われる子供も何人かいた。

「今採集したものなら持っていますよ。」

と言ったら、その男の人はポケットから財布を取り出して、

「それを売っていただけませんか？」

と言った。売るつもりなど全くなかったので、持っていたものをあげた。

もらったカブトムシやクワガタを持って帰る彼らを見つめながら、採集の仕方がわからぬ人もいるのだと思った。彼らはこういう昆虫のいないところに住んでいるのだろう。

八月になると、クロアゲハやアゲハなどのアゲハチョウの仲間、ルリタテハやアカタテハなどのタテハチョウの仲間も増えてくる。ルリタテハ等は成虫を見つけることもできるが、サルトリイバラという植物の葉の裏を探せば卵や幼虫を見つけることもできる。

雑木林というのは昆虫の宝庫である。

※ゼフィルス —— 樹上性のシジミチョウ科の一群。

これはちょうど五十年前に書いた私の文章です。当時は多摩地区の多くのところに広い雑木林が残り、里山の自然が残されていました。その中にはたくさんの昆虫が生息していて、採集する人もたくさんいました。現在東久留米に寄贈させていただいた私の標本のかなりの割合を、ここで採集したものが占めています。

その中から、チョウの四種について取り上げてみました。これらは、環境省レッドリストに取り上げられているものです。

①ギンイチモンジセセリ（準絶滅危惧）

翅の色のうち表は暗褐色ですが裏は後翅が黄土色でそこに銀白色の帯があるため、その名がついています。かつて、このチョウを見つけるためにススキの群生地に出かけて、棒でたたき、飛び出るのを待ったことがありました。幼虫の食草がススキですが、成虫は花などにも集まり、ゆるやかに飛びます。あまり目立たない種で、注意して探さないと見つけることができないようです。かつて、小学生に見せたところ、ガの仲間と思われてしまったことがありました。確かに、形や色だけからすると、似たものがガの仲間にあります。



ギンイチモンジセセリ

②ツマグロキチョウ（絶滅危惧Ⅰ類）

キタキチョウに似ており、夏型は特に判断するのが難しいようです。ただ、キタキチョウに比べるとやや小型で、翅の縁の模様に少し違いが見られます。食草はカワラケツメイというマメ科の植物で、その植物のある場所にはたくさん見られることもありました。キタキチョウは、カワラケツメイはほとんど食べないので（キタキチョウの食草はネムノキやハギなど）、その食草の違いからも区別されます。



ツマグロキチョウ

③クロシジミ（絶滅危惧Ⅰ類）

その名の通り、翅の色は全体に黒く、雄は少し紫色を帯びています。このチョウの生活史はたいへん珍しいものです。雌はコナラやクヌギなどのアブラムシの多い場所に産卵します。やがて孵化した幼虫は、アブラムシの甘い分泌液をなめて成長しますが、ある大きさになるとクロオオアリによってその巣に運ばれ、そこで育てられて蛹になります。クロオオアリはこの幼虫が出す蜜を餌としてもらい、いわゆる共生の関係を保ちつつ生活します。クロシジミの生活はチョウの中でも極めて変わったものだといえます。このクロシジミもかつては雑木林に非常にたくさん見られたのですが、やはりこれも、現在では数少ない種になってしまいました。珍しい生活史を示す代表として、いつまでも近くに残しておきたい種です。



クロシジミ

④オオムラサキ（準絶滅危惧）

日本の国蝶として通常切手にもその姿が描かれていました。雄は翅の表の大部分が紫色に輝きますが雌はその輝きがないので一目で判断できます。かつては武蔵野に普通の種であったようですが、今ではほとんど見られなくなりました。幼虫の生態などはゴマダラチョウにほぼ同じで、幼虫の形も似ています。（前述したように、オオムラサキの幼虫もゴマダラチョウと同じエノキの葉を食べて成長します。）



オオムラサキ

（参考）環境省レッドリストのカテゴリー

- 絶滅（Extinct, EX）・・・日本ではすでに絶滅したと考えられる種
- 野生絶滅（Extinct in the Wild, EW）・・・飼育・栽培下でのみ存続している種
- 絶滅危惧（Threatened）
 - 絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）・・・絶滅の危機に瀕している種
 - 絶滅危惧ⅠA類（Critically Endangered, CR）・・・ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
 - 絶滅危惧ⅠB類（Endangered, EN）・・・ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
 - 絶滅危惧Ⅱ類（Vulnerable, VU）・・・絶滅の危険が増大している種
- 準絶滅危惧（Near Threatened, NT）・・・存続基盤が脆弱な種

どのチョウも、今は東久留米ではほとんど見られなくなっていました。オオムラサキについては、多くのところで飼育と放蝶に取り組んでいて、その影響で時折姿を見ることもありますが、存続基盤が脆弱な種であることに変わりありません。

このような昆虫がこれから出てこないようにするためにどうしたらいいかを考えていく必要があります。

（北原 俊幸 東久留米市文化財保護審議会委員）

〔編集〕 東久留米市郷土資料室（教育委員会生涯学習課文化財係）

〒203 - 0033

東京都東久留米市滝山4-3-14 東久留米市わくわく健康プラザ内

電話 042 - 472 - 0051 FAX 042 - 472 - 0057